

# 中世・草戸千軒探検 19

つく ばんしょう  
～作る(番匠)～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生

活の様子を詳しく紹介しています。

今回からしばらくは、「ものづくり」にかかわった職人の世界を、「作る」のコーナーの展示資料を中心に紹介しましょう。



木の葉形鋸の出土状況

この鋸は、木の葉を縦に半分にしたような形から「木の葉形鋸」と呼ばれています。日本の中世に数多く制作された寺社縁起絵巻にしばしば登場することから、中世に特徴的な鋸と考えられていましたが、その実物が伝わっておらず、本当にこのような形の鋸が存在したかどうかさえ疑われていました。ところが、1981年の発掘

「作る」の初回では、番匠と呼ばれた人々の活動を紹介します。番匠とは、現在でいえば大工の棟梁に相当する、建築に關与する職人のことです。

「草戸千軒」の町で番匠が活動したことを示しているのが、遺跡から出土したさまざまな大工道具です。出土した大工道具には、手斧・鋸・鑿・錐・木槌などがありますが、とくに鋸は、日本列島における大工道具の歴史を明らかにするうえで貴重な役割を果たしました。

この鋸は、木の



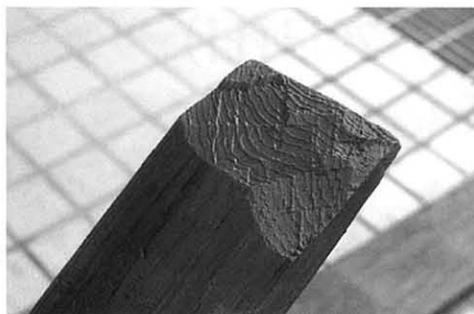
展示室「作る」のコーナーに展示された鋸



壁木舞の出土状況

調査で鎌倉時代の溝に廃棄された木の葉形鋸が発見され、こうした形態の鋸が実在することが明らかになりました。その後、この鋸は神戸市の竹中大工道具館によって復元品が作られるとともに、その性能を確認するための実験も行われています。

一方、番匠たちによって加工されたさまざまな建築部材も出土しています。たとえば1983年の発掘調査では、土壁の骨組みである壁木舞と呼ばれる部材が見つかっています。これは針葉樹の細長い板材を格子状に組んだもので、建築工事の途中で、何らかの事情で不要になった部材が廃棄されたものと考えられます。



井戸材に残された手斧の加工痕

また、遺跡からは約200基の井戸が見つっていますが、その大部分は木材を組んだ井戸枠をもっています。これらの井戸枠の部材には、鑿や鋸をはじめとする大工道具の痕跡が残されています。そこからは草戸千軒で活動した番匠たちの息づかいを感じることができるだけでなく、当時の木材加工技術の実態を知るための貴重な資料となっています。

(主任学芸員 鈴木康之)